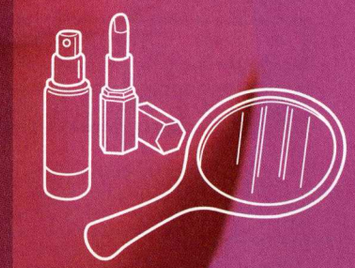
特集

化粧

化粧をすることで、自己主張したり、また個を埋没させたりもする。その役割は、文化や社会情勢などによってさまざまだ。特集では、人びとにとって化粧とは何か、について考えてみたい。



現代化粧文化事情

玉置 育子
（たまき やすこ）
大阪樟蔭女子大学講師

女性の多くは化粧をしているにもかかわらず、「化粧」を人から学んだ経験のある人は少ない。それなのに何故だか自分の顔に化粧ができる。

むかしは、高校にメーカーが赴き卒業直前の女子高生に化粧法を教授していたという。しかし現在は、化粧法を学ぶ場はカルチャーセンター、もしくは百貨店の化粧品売り場であり、化粧の先生はメイクアップアーティストや百貨店の美容部員といったところだろう。化粧を学ぶ場として専門学校は？という意見もありそうだが、専門学校はもっぱら他人に施す化粧法の習得に特化しており、自分の顔を化粧することは少ないようだ。

現在、女子高生が化粧をしていても驚かない時代であるにもかかわらず、「化粧」を学べる場所は少ない。お笑い芸人の故岡八郎の「オレなぁ～、空手習ってん。通信教育やけどな」というギャグがあったが、化粧はそれに近いものがある。雑誌を手にとり、掲載されている化粧品を参考に見よう見まねで自分の顔に化粧を施していく。化粧とは恐ろしく、そして皮肉なもので学習成果が自分の顔に残る。癖として残り続ける。ときには、その学習成果が時代に合っていないと「流行おくれ」とレッテルを貼られたりすることさえある。ふたつとして同じ顔はないので、化粧法はオーダーメイドであってもいいはずだ。そうすべく、自分の顔に合った化粧を日々手さぐりで探している状態なのだ。

テレビをつけると、化粧品のCMを見ない日が無いくらいに情報はあふれているが、わたしたちは化粧についてこれまで「学ぶ機会」がほとんど無かった。もちろん、大学などで化粧を学ぶなんて言語道断だった。

多様な学問からアプローチ

大阪樟蔭女子大学では二〇〇七年度に日本で初めて化粧文化専攻を設置した。被服学科の一専攻として位置づけられ、被服と化粧を併せてトータルファッション的に学ぶことを目的とし、次のように多様な学問から化粧を学べるよう将来像を描いている。

美の哲学を学ぶ「美そのものの研究分野」や、化粧文化論、身体装飾論、化粧心理学、美と経済学・政治学を学ぶ「美と個人あるいは美と社会の関係の研究」、メイクデザイン実習をする「美の創造としてのアート活動分野」、化粧品学、皮膚科学を学ぶ「化学的研究分野」など多岐にわたる。

つまり、化粧法の技術だけでなく、「化粧」を哲学、社会学、文化人類学、経済学、政治学、心理学、芸術、化学的視座から学ぶということである。今後、さらに様々な学問から化粧へのアプローチが可能だろう。美しさを押し付けるのではなく、化粧に対して観察力、客観的な視座を養いながら、学生とともにこれからの「化粧文化」を切り拓いていきたいと思っている。学問のエッセンスを融合させ、化粧の多面性を学ぶ場を提供できればと考えている。

化粧は幅が広い、奥も深い。その広さと深さを面白いと思ってもらえれば幸いである。

これからは「スロービューティー」

石田 かおり
（いしだ かおり）
駒沢女子大学准教授

昨年からマスコミを賑わせている議論に、ファッションモデルの痩せすぎがある。若い女性の極端な痩せ願望や過剰なダイエットを煽（あお）っているとして、BMI値（痩せや肥満の指数）による制限が設けられた。スペインとイタリアがこれに従って指数で痩せすぎのモデルのショーへの出場停止を実施し、それに対する賛否をめぐる議論が起きた。これはファッションモデルが美容の手本になっていることを物語っている。

読者のなかにもおしゃれに目覚めたころ、流行のタレントや活躍中のスポーツ選手など、人気者の髪型・化粧・服装を真似た人も少なくないだろう。誰でもおしゃれの始めは人まねだ。人まねをしているあいだ、手本は自分の外にある。つまりこの時期のおしゃれとは、個人の外にある価値基準に自分を合わせる努力である。しかし経験を積むうちに、あるいは加齢にともなう諦めや開き直りも加わって、いつの間にか人まねから脱するようになっている。

不自然なファストビューティー

しかし、最近はそうもいかなくなった。「若くなければ美しくない」と思う人が多数派になり、同世代にもかかわらず二〇歳も四〇歳も若く見えるタレントや美容のプロを目標に、美容に励む傾向が強まっている。これは女性だけではない。大都会に住み、高収入のおしゃれに熱心な男性「メトロセクシャル」の登場以来、男性も同じ状況だ。現在アンチエイジング（抗老化）は、美容と健康の最大の目的と市場になっている。ここでもまた、個人の外にある価値基準にいかに自分を近づけるかの努力がなされている。しかも、生物にとって自然現象である加齢を問題視し、「解決」する方向性なので、外見格差や老人差別に結びつく傾向も見え始めている。

二〇世紀の生産・流通技術と経済発展にともなう化粧品や健康用品とその情報の普及により、画一的価値に基づいた美容が急激に進み、その結果即効性と若さを求める傾向が強まった。この「ファストビューティー」は、生物としての自然現象に逆行する意味でも、自分がもって生まれた資質と人生経験により培ってきた要素を無視するという意味でも、「不自然な」美容だ。

だからこそ「自然な」美容である「スロービューティー」が、人がよく生きるために必要ではないのか。人それぞれ・年それぞれの美しさ。価値基準を個人に内在化させ、しかも人生の歩みに沿って毎年変化する基準、それが社会と個人における美の多様性を生み出し、誰も窮屈な思いをせずに生きられる社会の実現にも結びつくとわたしは信じて、二〇〇三年秋から「スロービューティー」の提唱と普及活動と、そのための研究をしている。

社会現象としての中国の化粧

韓　敏
（カン ビン）
本館民族社会研究部

中国の長い化粧史のなかで、女性の化粧のポイントは主として顔であり、耳と首もその範疇（はんちゅう）に入っていた。顔の化粧は基本的には、おしろいを塗り、頬紅と口紅をつけることである。そのなかで顔の白さは化粧の原点であり、今でも「一白遮百醜（イーバイザーバイチュー）（白ければ全ての醜さを隠す）」ということわざがよくいわれている。

化粧は政治・経済、審美観、生活スタイルにかかわる複雑な社会現象であり、常に変化している。清楚で優雅な女性像を求めていた漢・宋・清などの王朝時代には、繊細でしなやかな美しさは化粧の到達点であったが、大胆さと華麗さを求めていた唐代には「烏唇（ウーチュン）」という唇を黒くする化粧法が流行っていた。

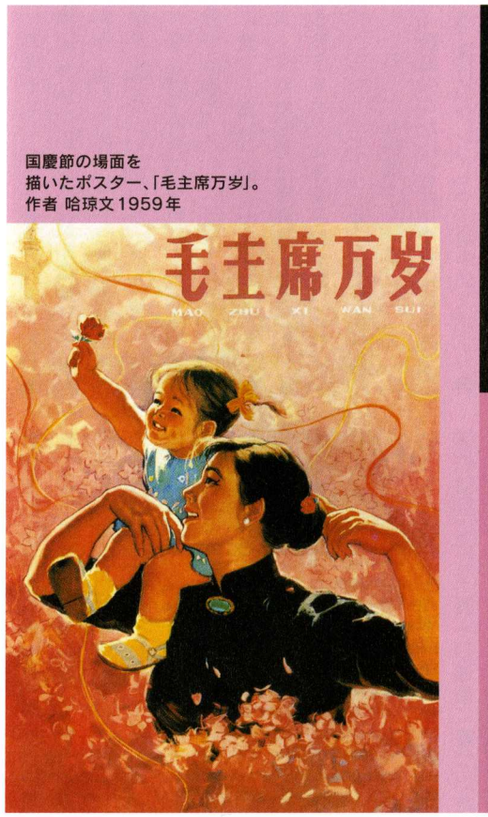
二〇世紀に入り、フランスなどの西洋化粧品や欧米の映画が中国にもたらされるとともに、アイシャドーやアイラインを入れる立体感のある欧米型の化粧法も知られるようになった。しかし、中国の女性たちにはあまり好まれなかったようである。二〇世紀の半ばまでは、「白」を基本とする細い半月の眉毛と丸顔は依然として化粧の主流をなしていた。

一九五〇～一九七〇年代までの毛沢東時代では、数千年の歴史をもつ女性の化粧は次第に中国から消えてしまった。革命によって、女性は生物学的意味や家庭や親族の関係から捨象され、政治的存在として表象されるようになり、男性と同じように社会進出する、社会主義建設のための貴重な労働力であるべき存在となった。そのため、社会主義革命につながらない生産性のない女性の化粧はブルジョア的、搾取階級の生活様式とされ、批判の対象になった。

「毛主席万歳（マオジューツーワンスイー）」というタイトルのポスターは女性がイヤリングをし、翡翠のブローチを付けたというだけで、各地で批判されていた。「不愛紅装愛武装（ブーアイホンジュアンアイウージュアン）（華美な化粧と衣装で飾るより、祖国を守る服装を愛す）」という毛沢東の有名な文句は革命時代の中性化、あるいは男性化された女性像を適切にあらわしている。そのころの化粧を施さない女性にとって、唯一手に入る美容品は上海で製造された「雪花膏（シュエーファーガウー）」とよばれるクリームであった。

多様化する化粧

一九八〇年代から女性の化粧は徐々に回復され、化粧品の増加とともに、女性像も多様化し、古典的で清楚なもののほかに個性、知性、野性、自信、反抗心、セクシーさ、健康さなどを強調したものもあらわれている。一九九〇年代に入ると、大都会の女性化粧のイメージの変化は、ほぼ先進国と同時進行するようになっているが、先進国と比べて、化粧は二〇～四〇代までの裕福な女性に集中するところが中国の特徴である。

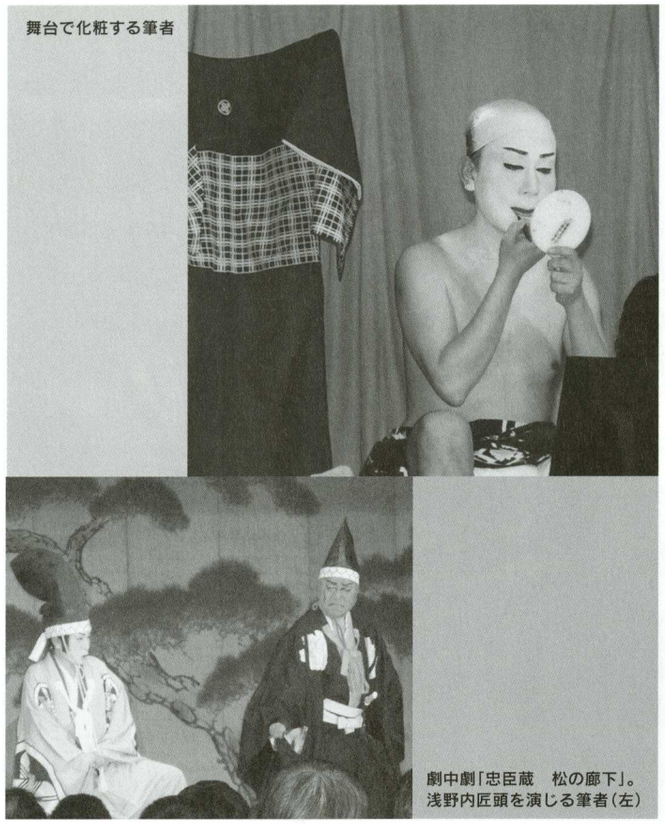


国慶節の場面を描いたポスター、「毛主席万歳」。作者 哈琼文1959年

武漢のある新婚夫婦。働いている彼女の化粧は古典的な清楚さ、自信と知性をもち合わせている 2001年

舞台で化粧をする芝居

鵜飼 正樹
（うかい まさき）
京都文教大学准教授


舞台で化粧する筆者

劇中劇「忠臣蔵　松の廊下」。浅野内匠頭を演じる筆者（左）

大衆演劇に、舞台で化粧をする芝居がある。通称「旅役者の一夜」。同じ芝居が、わたしの師匠の劇団で上演されるときは、「師弟愛」という題名になる。

時代は大正から昭和初期であろうか。ある地方の旅回りの一座に、東京の大歌舞伎の名題（なだい）（幹部級の役者）が賛助出演することになった。しかし、一座の座長は病気のため、相手役として舞台に立つことができない。そして、久しぶりに座長を楽屋に訪ねてきた弟子が、急きょ、代役を務めることになる。

弟子が素顔から化粧をし、衣装を着ると、劇中劇の幕が開く。劇中劇は、「忠臣蔵」や「加賀見山」など、とにかく名題が敵役を演じ、弟子を徹底していじめる芝居がいい。

大衆演劇といえば、主流は股旅（またたび）時代剣劇であるが、こういう芝居も、ときには上演される。わたしの好きな芝居のひとつである。

じつは、わたしは昨年、この芝居の主役を演じた。「南條まさき芸能生活二十五周年記念リサイタル」と銘打った公演の芝居が、この「師弟愛」だったのである。

まず心配だったのは、化粧のスピードだった。わたしが舞台で化粧をしているあいだも、芝居は続いている。ほかの人が芝居をして、間をもたせてくれている。だが、それにも限度がある。わたしに許される時間は、一五分以内。はたして、観客の目の前で、スポットライトを浴びながら、そんな短時間で化粧できるのか。

結果からいえば、けっこう余裕があった。あとからビデオでチェックしてみると、化粧に要したのは一二分ぐらいである。

キャリア積むほど速く

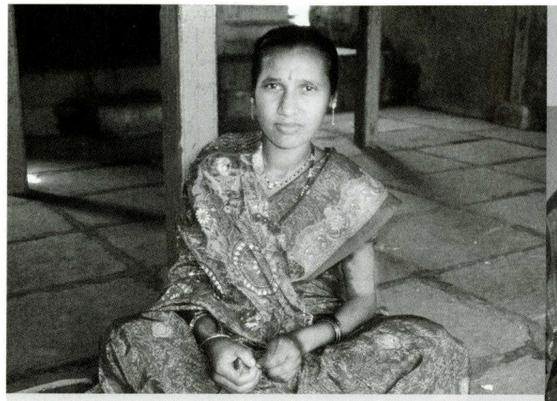
役者として弟子入りして、最初の化粧は、先輩にしてもらった。化粧品が臭く、スポンジではたかれた顔が痛く、あとからかゆくてしかたがなかった。ひと月もすれば、自分で化粧をするようになったが、「なんじゃその顔は」とよく笑われた。ようやくそれなりにマシな化粧ができるようになったのは、半年ぐらい経ってからである。

大衆演劇の化粧は、そのルーツである歌舞伎と共通するところが多い。ただ、大衆演劇の出しものは日替わりだ。昨日は女形、今日は老け役、明日は敵役と、日ごとに化粧を変えて芝居する。化粧が遅いようでは、やっていけない世界である。

わたしはもちろん、二五年のあいだずっと舞台に立ち続けてきたわけではない。一年間にのべ一〇日も立つか立たないかというところだ。それでも、いつの間にか化粧が速くできるようになっていた。芝居の出来より、化粧の速さにこそ、わたしの芸能生活二五年のキャリアがあらわれているといえるのかもしれない。

さて、「師弟愛」のその後の展開だが、それは大衆演劇の劇場に足を運び、芝居をご覧になってのお楽しみと、させていただきたい。

特集 化粧



赤いビンディを付けたヒンドゥー女性

結婚式の花嫁

色とりどりのビンディ（シール）は
雑貨屋などで手に入る

ビンディで「女」になる

松尾 瑞穂
（まつお みずほ）

本館外来研究員

あなたが女性だとしよう。朝、目が覚めたら遅刻寸前である。いつもはきちんとメイクをしているのに、今朝は時間がないとしたら？こんな質問に、とりあえずファンデーションを塗る、あるいは何はなくとも眉毛だけは描かなきゃ、と答えるかもしれない。わたしがつきあっているインドのヒンドゥー社会で同じ質問をしたならば、きっとほとんどの女性がこう答えるだろう―「ビンディ！」と。

ビンディとは、女性の額の真ん中にぽつんと付いた赤い染料を用いた印やシールのことである。もとは既婚女性の象徴であるが、今では若い女性もおしゃれとして楽しんでいる。ムンバイのような大都市で会社勤めをしている女性たちは、美容院で眉毛を整えてもらい、口紅やチークなどで化粧をすることもあるが、ふつうは結婚式などを除いてほとんど化粧をしない人が大半である。こうした女性たちにとっては、朝の沐浴のあとに、粉おしろいを顔にはたいて、額の真ん中にきちんとくるように慎重にビンディを付けることが、日常的な「お化粧」である。最近では赤色のほかに、ビーズが付いた豪華なものやカラフルなシールなど数百種類もある。一〇枚ほど入った一シートで一〇～三〇ルピー（約三〇～九〇円）と手ごろなので、若い人のあいだでは、その日のファッションに合わせて、毎日違う色のものを付け替えることも流行っている。ビンディを付けた顔を見慣れていると、夜寝る前などに付けていないのを見たときには、何か違和感があるほどだ。

「女性」たらしめる

ビンディをめぐっては、印象的な思い出がある。わたしが村に住んでいたとき、女性たちを集めたワークショップに参加したことがあった。一人の女性が床に手足を広げて寝転び、身体のかたちをチョークでなぞる。残された人型を前にして、「男女の違いは何？」とNGOスタッフが尋ねると、一人の女性がチョークを手にとり、真っ先に額に丸い印を付けた。たったそれだけで、性別のない人型が一瞬にして「女」となったのである。毎朝鏡の前でビンディを付ける、そんな日常のお化粧が、インドの女性を女性たらしめているのかもしれない。

特集 化粧

白化粧の「新成人」

石田 慎一郎
（いしだ しんいちろう）

本館外来研究員

ケニア中央高地メル民族の調査を始めてから、まる六年経った。村人とのつきあいが進むと、卒業式や結婚式など、それぞれの人生の節目を祝福する式典に参加する機会が増えてくる。よいカメラをもっているという理由で、撮影係を引き受けたこともある。そんなこともあって、華やかに身繕いした村人のスナップをたくさんもっている。

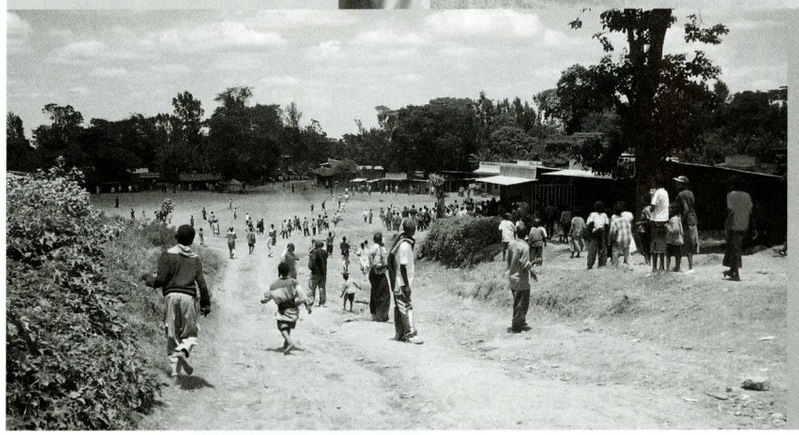
個を埋没させる

一方、強く希望しても、撮影が許されない人生儀礼の一コマがある。伝統的な割礼を済ませた男の「新成人」の一斉お披露目の場面だ。一行は、短パンひとつで、しかも顔から脛の先まで白い泥を塗り固めた姿であらわれる。毛皮をまとった仮面男に率いられ、村中を駆けめぐる。ピーッピ、ピーッピと、乾いた笛の音のみを連発し、ことばになる声はいっさい発しない。仮面男は、商店に押しかけては、笛の調子に合わせて手のひらを差し出す仕草で無心する。続く白化粧は、棒切れを振り回し、遠巻きの子どもたちを威嚇する。どちらの顔も、誰だかわからなくなっている。こうして「新成人」の個は埋没するが、一行全体は引きたって見える。

割礼は、おとなの男になるために必要なステップのひとつである。少年たちは、割礼を済ませると、しばらくのあいだ隔離小屋で身を潜め、傷が癒えるのを待つ。そして、いよいよ「新成人」として姿をあらわす。こんにち、お披露目のやり方は、割礼方法に応じてふたつにわかれる。村の割礼師が施術した場合、「新成人」は前文のように白化粧であらわれる。他方、病院で割礼手術を受けた場合、「新成人」は、新しい衣服に身を包み、披露宴の主役としてあらわれる。

仮面男に率いられた白化粧が駆けめぐるあの場面は、わたしにとっては、どれも写真に収めたくなるものである。公の場に姿をあらわしたところなのだから構わないのではないかと思ってしまうが、カメラを向けてはならない。絶対にやめなさいと、みながわたしに忠告する。むかしながらの割礼は、その多くの部分が当事者のみぞ知る秘密とされているからである。

新しいタイプの割礼を
受けた「新成人」。
披露宴は写真撮影可能だ



伝統的な白化粧の「新成人」を
遠巻きに見る子どもたち